

恋人はスナイパー <偽りと隠された真実>

作：ウッチャン大好きっ子

* < > で閉じられている会話は、中国語での会話になります。

新キャラ

1. 天山 秋 (あまやま あき)
2. 青水 きなこ (あおみず きなこ)

解説

1. ”心因性失声症”・・・『踊る〜』で水野美紀さん演じる
柏木 雪乃が一話からかかっていた病気である。
2. ”ドラグノフ”・・・ライフルの名前で、「バトルロワイアル」で
桜井 サキ (加藤 夏希) が使ったスナイパーライフルです。
3. ”H&K PSG - 1”・・・読み方は「ヘッケラー&マック PSG - 1」で
こちらもスナイパーライフルです。
こちらの方が”ドラグノフ”よりも優れた狙撃のためのライフルです。
”ステアー”よりも大きく全長1208 mmの大型ライフルです。

~ 第15章 ~ <心>

龍冴に連れられ病室から出たきなこはあまりにも恐怖に戦き、深刻な顔をした龍冴に驚いた。龍冴は肩で息をしながら青ざめた顔できなこを見つめ、何かを言おうとしたが飲み込んでしまった。そこへプロフェッサーが連絡を受けてやってきた。その顔にも恐怖に近いものが見えた。プロフェッサーは龍冴の状態を見て、すぐにインカムで指示を出した。その指示の内容にきなこは驚いた。その指示とは”精神科医”と”言語療法士”を呼ぶ事だった。指示後、プロフェッサーは龍冴の襟袈りを掴み、壁に押しやりながら怒鳴った。「龍冴！ しっかりせんか！ お前はアイツの担当医じゃろうが。きなこさんに状況を説明せんか！」しばらく押し黙ってから、小さく龍冴は答えた。「俺には、。説明できない、。俺は、。 」と悔しさからか、歯を食いしばり黙ってしまった。「龍冴、お前の担当外ではありが、お前が一番あの病気の事をよく知っているはずじゃ！ しっかりせんか。役目を果たさんか！」とプロフェッサーが言った。「くっ。分かったよ、。きなこさん、俺の担当科ではないので断言は出来ないが分かる範囲で説明させてもらう、。 」と龍冴は深呼吸をして説明を始めた。「凱歌は現在声が出せない状態にあります。これは手術の際の脊髄の損傷によるものではないと思われま。理由は先ほど凱歌に、声を出すように指示した際に声帯に微量ですが反応していたので、脳からの指示が届いている事が指しています。

そして、凱歌は我々の言っている事が理解できている事から”失語症”ではないと思われます。この事から声が出ないのは、、、”心因性失声症”と思われます。恐らく、、、と静かに説明した。きなこは説明された事が理解できなかった。もしかするきなこは認めたくなかったのかもしれない。「あのう聞きたいんですけど。”失語症”と”失声症”の違いが分からないし、治るんですか？」ときなこは龍冴に聞いた。

「二つの違いは簡単に言いますと、”失言症”は字の如く”言語を失う”という意味で、相手の言っている事すら理解できない状態になる病気です。

”失声症”は字の如く”声を失う”という意味で、これは相手の言っている事は理解できるが声を出す事が出来ない病気です。あと”心因性”とは”精神的な原因から”という意味です。もちろん治ります。但し、心の病気なので掛かる時間は個別に違います。治療にもよりますが、早ければ1週間以内。遅ければ数年以上とまちまちです。」と質問に龍冴は手馴れた感じで答えた。

きなこはその手馴れた感じが妙に引っかかった。まるで掛かった事が有るかの様に。「しかし、凱歌の心がもっとも分かるのは他のどの医者よりもお前のはずじゃ。その上、凱歌の担当医はお前じゃ。他の医者に手渡していいのか？」とプロフェッサーは担当する様に勧めた。

しかし、龍冴はそれを振り切り、その場から立ち去ろうとした。「お前は過去から逃げる気か！どうせ、二人に過去を話すのだから今話そうが、後で話そうが一緒じゃろうが！それが一番の薬になるんじゃないから、担当医としての役目を果たせ。いや！先輩スナイパーとして、お前個人的でいいから話してやれ。分かっているはずだ。どうするべきか知っておるはずじゃ、、、。」とプロフェッサーは怒鳴った。その時、突然大きな警報のようなものが鳴り響いた。二人は慌てて走っていた。きなこは二人を追った。

～第16章～<事件発生>

- ミーティングルーム -

二人が駆け込んだ部屋は明希とケーキを食べた部屋だった。しかし、その時とは別室の様だった。すでに蒼凱と碧河が深刻な顔で待っていた。

龍冴の顔は医師の顔ではなく、リーダーの顔になっていた。入るなりすばやく状況を聞いていった。「一体何があった？事件なのは分かるが、内容を報告しろ。」と龍冴は言った。「警察からの協力要請です。事件の内容は立てこもり事件の様です。しかし、少々問題が、、、。」と蒼凱が言葉を濁らした。龍冴はその事に苛立ちながら言った。

「”問題”って？正確に報告しろ。どんな事でもかまわん！」と龍冴は怒鳴った。「分かりました。どうも1211がこの立てこもり事件の犯人の様です。そして、事件現場になっているパーティーには潜入していた国際二課の刑事達が人質になっています。要求も王 凱歌に関わってくると思います。」と蒼凱は報告した。

「”関わってくると思う”だと。正確な事はまだか、、、分かった。蒼凱、お前は要求を聞きに先に行ってくれ。詳細をこちに降ろしてくれ。」と龍冴は指示した。蒼凱は「分かりました。」と答え、すばやく出て行った。そのすばやい指示にきなこはますますこの集団が分からなくなった。

龍冴は蒼凱が詳細を送ってくるまで現場の地図を全員で見ている。きなこは国際二課のみんなが巻き込まれた事に動揺した。国際二課の面々は誰もが武術の達人であったからである。きなこは龍冴達と共に地図を見ていた。龍冴達は何やら距離や方角など地形を気にしていた。

- 30分後 -

蒼凱から連絡が入った。

内容は現場で国際二課が追っていた密輸組織の表向きの貿易会社のパーティー会場で、ここで売買が行なわれるとの情報から刑事が潜入していた。そこに武装した犯人が入ってきたというものだった。

要求は驚いた事に黒帝 龍冴を現場に連れて来る事だった。金や逃走ルートではなかった。

これには、龍冴がその場に居た者の中で一番驚いていた。しかし、龍冴には心当たりがないと思っていたが、よくよく考えていく内に凱歌を連行する際に自分の名を言っていた事を思い出した。

この事件が1211が起こしたのならこれが要求になる原因である。

龍冴は「分かった。そのまま時間を稼いでくれ。」と言い、連絡を切った。

しかし、その場に居た者は不思議だった。なぜなら、王 凱歌を直接要求せず龍冴を連れてくる事を要求したのである。龍冴は歯を食いしばりながらしばらく考えこんでいった。

「碧河、すぐに俺に化けてくれ。俺はこのビルの屋上から中の様子を見ている。プロフェッサーはきなこさんとここに居てくれ。碧河は俺に化けたら俺の代わりに現場で犯人達の要求を随時伝えてくれ。俺は狙撃を試してみる。」と言った。しかし、きなこはその指示に驚いた。

確かに現場になっている部屋を見る事は真ん前にあるビルの屋上からなら中の様子を見る事が出来たが、狙撃は不可能だった。なぜなら、その距離が軽く400mは離れていた。凱歌ですら不可能である。それをやろうというのである。

きなこは咄嗟に言ってしまった。

「狙撃なんて、この距離ではホイさんですら不可能です。第一、要求をまず聞くべきです！」と龍冴の腕を掴みに言った。

龍冴はぼかんとしばらく固まった後、突然笑いながら答えた。

「まあ、見てみてください。碧河の変化を。あと俺は”生と死を司る使徒”です。まあ、説明はあとで。」と言い、きなこの手を外してから合図を行動を開始した。きなこは納得がいかなかった。

- 数分後 -

部屋に戻ってきたメンバーを見て、きなこは驚いた。なんと、龍冴が二人居たのである。声も雰囲気すら同じであった。まるでホイと碧河の様に、、、。

きなこは『あれ!?これって!?』と遂に気が付き、完璧に変化し過ぎなのである。

「どうして!?龍冴さんが二人!?碧河さんが化けているとしてもそっくり過ぎる。まさか、碧河さんってホイさんに化けていた姿なんですか!?」ときなこは二人の龍冴に言った。二人の龍冴は顔を見合わせ、左の龍冴が答えた。

「ああ、そうだ。あれは王 凱歌にアイツが化けた姿だ。なかなか凄いだろ?」と答えた。しかし、右の龍冴が不満そうな顔し言った。

「おいおい、本物の俺みたいな言い方するなよ。俺が碧河みたいじゃねえかよ!」と喧嘩みたいになっちゃった。きなこは訳が分からなくなっちゃってしまい、怒鳴っちゃった。

「いい加減にしてください！どっちでもいいですから現場に向かってください！」

きなこが怒鳴ると全員が笑い出した。そして、左の龍牙が答えた。

「悪かったな。ちょっと冗談のつもりだったんだがな、。本物の龍牙は俺だ。

じゃあ、現場に向かいますか。プロフェッサー、ライフルを頼む。そうだな、愛器の”ステアー”だと少々不安があるな～。やっぱり、ここは”ドラグノフ”や”H&K PSG-1”の方が良さそうだよ、。」「とライフルについて龍牙が考えていた時、連絡が入ってきた。

「こちら蒼凱。新たな要求がありました。しかし、それがちょっと変なんです。」と首を傾げながら言ったような声で言った。龍牙は不思議そうに報告する蒼凱に嫌な予感をさせながら続きを聞いた。

「それがですね、。 ”こちらを狙撃しろ”と言うんです。但し、完璧に犯人全員を狙撃できなければビルを爆破すると言うんです。」と報告した。

龍牙は「随分とこちらを試すような事を言ってくれる。全員か、。やはりパーティー参加者にも犯人が居ると言う事か。」と聞いた。その時蒼凱が更に付け加えた。

「実はその狙撃を行う人間を指定したんです。王 凱歌を指定して来たんです。」と蒼凱が報告した。

連絡を聞いた全員が「はぁ～！」と絶叫した。その時龍牙は背後に気配を感じ、振り返るとそこに壁にもたれながら立つ凱歌がいた。

凱歌は手術を終えたばかりの体だったが目にはしっかりとした意志が窺もっていた。

声の出ない口で凱歌は何かを言おうとした。周囲の者が何が言いたいのか分からなかったが、読唇術が出来る龍牙は声の出ない口で必死に言おう事を理解した。

それは「多くの人の命のためなら僕はどうなってもいい。」という感じのものだった。

そして、多くの人のためなら罪を、狙撃を行なってもいいというのである。

龍牙はその言葉に『救って良かった』と思ったがすぐに現実を直視した。

凱歌では”不可能”である事を。完全な状態であったとしても、。、。

龍牙は「凱歌。君ではこの狙撃は無理だ。俺がお前になって行なえばいい事だ。」とやや微笑んだ感じで言った後、今度は冷静に担当医として「第一、そのボロボロの体と失声症の君を、今でさえ病室で安静にしなくてはならないという状態であるのに、これ以上の負担は医者としてさせるわけにはいかない。」と真剣な眼差しで言った。

確かに凱歌は自分の状態を考えると仕方がなくと考え納得しようとしたが、諦め切れなかった。

龍牙は凱歌が納得していない事を感じつつ、碧河に指示を出した。その内容は、龍牙を凱歌に化けさせるというものだった。

碧河は突然の指示に固まってしまったが、少しして仕方がなく了承し龍牙と共に奥に行ってしまった。

凱歌は龍牙が二人居る事に今、気が驚いたが『俺がお前になる』と言う意味が理解できなかった。

- 5分後 -

二人が奥から戻ってきた。その姿に部屋に居た者は驚いた。正にそこには龍牙と王 凱歌が並んで立っていた。

凱歌は先ほど龍牙が言っていた事を理解し目の当たりにした。自分がもう一人いる感じで恐ろしさを感じた。あまりにも凱歌がじろじろ見るので偽凱歌が笑ってしまった。その声は龍牙の声だった。

隣にいた偽龍牙が「早く薬を飲め！声が元のままじゃねえか！」と本物と同じ言い回しだった。

笑っていた偽凱歌が「分かった。分かった。」と薬を受け取り、口にした。しばらく喉を押さえてから、口元を緩め、声を出した。

「僕の声は完全に王 凱歌になりましたか？これで完全に貴方ですね。」と静かに凱歌に向かって言った。正に凱歌そのものだった。

「さて、ライフルの事ですが、姿を相手に見せる必要があるので、。愛器の”ステアー”と”H&K PSG - 1”の2丁で行きましょう。あと、高画質カメラ1台で音声分析器等がある物をお願いします。」と偽凱歌が言った。どうも言葉使いも凱歌に似てくるらしい。

偽龍牙は、”デザートイーグル”を2丁手にしていた。ゆっくりとマガジンを確認してセットしていた。その目は真剣そのものだった。すると偽凱歌が道具を準備していると柵から釣り竿のような物が出てきた。それにみんなが気付き、不思議に思っていた。

その瞬間、偽凱歌は釣り竿のような物を使い、偽龍牙が持っていた”デザートイーグル”を奪った。あっという間の事にみんなが呆気に取られていた。偽凱歌が口元を緩め、”デザートイーグル”を点検しながらゆっくりとみんなの方を一步ずつ近づいて来た。

「こいつはこういう風に使うものです。物は使い様です。なかなかいい銃だ。君にぴったりだ。でも、龍牙には向かないですね。」と釣り竿のような物で指差しながら言った。そして、銃を偽龍牙に投げた。偽龍牙は慌てて銃を受け取り、偽凱歌を睨んだ。

「危ねえじゃねえかよ！銃は投げるな！」と怒鳴った。しかし、その目には怒りが籠もっておらず、言い終えると微笑んだ。

「でもやっぱり、その銃は龍牙には似合わないと思いますよ。やっぱり”あの銃”が一番だと思います。」と冷静に答え、電子ロックの金庫から黒塗りの箱を取り出した。それを真剣な眼差しで偽龍牙に手渡した。

偽龍牙はそれを不思議そうに見た後、箱をゆっくりと開けた。その中には、黒金の特殊な姿の短銃が2丁入っていた。その銃は正に”美しい”、”綺麗”という言葉が合う装飾銃だった、。

プロフェッサーはその光景を驚き、見つめていた。そして、偽龍牙はその銃を呆然とした表情で見えた。

凱歌ときなこは訳が分からず、顔を見合わせてしまった。訳の分からない二人に気付き、プロフェッサーは言った。

「あの銃はのう。龍牙が誰にも貸す事も見せる事さえも嫌がり、しなかった過去を語る物なんじゃ。だからそれを知るわしらは驚いてしまったんじゃ。」と驚きを隠しきれない顔で二人にあの銃の抱く事を教えた。

二人はより一層彼らに関して、興味と疑問を抱いた。

暫しの沈黙の後に、偽龍牙は静かに黒塗りの箱を偽凱歌に返し、沈痛な面持ちで言った。

「これは俺ではなく、貴方が使うべき物だ。第一、コイツは俺には使いこなせない。俺の愛器はアイツです。別の奴を使ったらアイツに嫌われちゃうからな。」と最後は元の明るい雰囲気に戻り答えた。

偽凱歌は「そうですね。貴方ではコイツは無理ですね。」と皮肉を言い、笑いながら金庫にしまった。そして、準備が終わり出発しようとした時、偽凱歌から突然殺気のような雰囲気が現れ、言った。「さっ、掃除しに行くぞ。」と。その声は凱歌のものだったが、それは冷酷な暗殺者のような声で言った。きなここと凱歌はその中身が龍牙だと実感した。そして、龍牙の恐ろしさを感じた。

～ 第 17 章 ～ < 交わる二つの閃光 >

施設を出発して 10 分後、偽龍牙が蒼凱の元に着いた。そして、偽凱歌もパーティー会場が見通せるビルの屋上に立っていた。

蒼凱と偽龍牙の確認を聞きながら、偽凱歌は高画質カメラとライフルの準備をしていた。もちろん指示も行っていた。そして、カメラの準備を終えてプロフェッサーに確認させた。プロフェッサーはきなこ凱歌と共にカメラの映像を見ていた。

そこからしっかりとパーティー会場内が見えていた。しかし、凱歌にはその場所が狙撃には向いていない事を悟った。

プロフェッサーは現場の状況を見ながら分析をしていた。そして 4 人は計画の最終確認をしていた、。その時、偽凱歌が急に動いた。それに気が付いたプロフェッサーが呼びかけながらカメラを動かした。そして、カメラに内蔵された高感度マイクが不思議な音を拾った。それを聞いた瞬間、凱歌とプロフェッサーは反応した。それは、。サイレンサーから発射された銃弾の音だった。しかも複数だった。

そう、偽凱歌は狙撃されていたのである。
プロフェッサー達が混乱している最中、偽凱歌は隠れていた。

偽凱歌が急に動いた時、偽凱歌にはパーティー会場のあるビルの屋上からこちらを狙っていたスナイパーの影が見たため動いたのであった。咄嗟に偽凱歌は手にしていた組み立て途中の”ステアー”を持ったまま、タンクの裏に走ったのである。その時、敵のスナイパーからの数発の狙撃を受けた。偽凱歌の脅威の反射神経のお陰で致命傷にならずに済んだ。

偽凱歌はタンクの陰から敵のスナイパーを確認しようとしたが、敵の狙撃は確実に偽凱歌を捕らえていた。そして、偽凱歌は最大のミスを犯していた。それは、手にしていたライフルは形こそ組み立ててはあったがスコープもサイレンサーすら付いていなかったのである。このまま発砲したら立てこもり犯にばれてしまうため、撃つ事が出来なかった。偽凱歌はカメラの隣に置いてあるパーツを取りに行く必要があった。

偽凱歌は『くそ！サイレンサーさえあれば撃つ事が出来るのに！！』と思った。

「プロフェッサー、聞こえますか？」と偽凱歌は連絡した。プロフェッサーは「どうしたんじゃ？大丈夫か？」と答えた。

偽凱歌は「僕は大丈夫だけど、。サイレンサーがないから撃てないんです。敵のスナイパーの位置をそっちで確認してくれませんか？僕はサイレンサーを何とか取りに行きますからお願いします。」と言い、動き出した。

プロフェッサーは「分かった。」と答え、カメラで屋上を調べていた。

そんな中、偽凱歌は着弾地点を予測しながらサイレンサーに近づいていた。しかし、徐々に相手の狙撃の精巧度が上がってきたために偽凱歌の体が徐々に傷ついていた。そして、遂にサイレンサーを掴み、物陰に走りこんだ。体中、擦り傷だらけだった。

息を整えながら”ステアー”にサイレンサーをセットしていた。そして、偽凱歌はプロフェッサーに状況を聞いた。しかし、カメラは敵を捕らえられずにいたのである。しかも狙撃がこちらを狙ってくる可能性があるため、少しずつしか動けなかったのである。

そして、偽凱歌の方も完全に問題が解決した訳ではなかった。彼はライフルにセットされている

マガジン1本しかなかった。つまり、30発ほどしかなかったのである。しかも、それは立てこもり犯を狙撃する分があるため、撃てるのは5発程度だった、。失敗が許されなかった。だが、スコープがない以上は自分の目と感覚で行くしかなかった。

「クソ！」と偽凱歌は言い、敵の弾が切れるのを静かに待った。そして、プロフェッサーがスナイパーを見つけるのを待たず、弾が切れた瞬間、偽凱歌は瞳を見開きライフルを構えた。そして、偽凱歌のサイレンサーが閃光を煌かせた。

「プシュッ、プシュッ、プシュッ」と3発の閃光が走った。1発は敵のスコープを破壊した。2発目はライフルを戦闘不能にする致命的一撃を加えた。最後の1発は敵の右肩を撃ち抜いた。その時、一筋の閃光が偽凱歌に向かって走った様に見えた、。

少し間に偽凱歌は素早くスコープを付け、もう1発放った。その弾はスナイパーの左腿を撃ち抜いた。その時、偽凱歌は目を細め、疑念に固まってしまった、。その間にスナイパーは怪我をした左足を引きずりながら引いていった。

プロフェッサー達はカメラで一瞬だったがスナイパーの姿を見た。その一瞬の事にきなこ凱歌は気づかなかったが、プロフェッサーは愕然としてしまった。

その後すぐに、蒼凱と偽龍牙が連絡してきた事で二人は何も無かったかの様に作戦の準備を続けた。

カメラの映像と情報からパーティー参加者は30名で刑事が5名、犯人は5人だった。

カメラの映像から刑事達が見事なまでに一人一人分けられ、他のパーティー参加者6名に囲まれている事が分かった。部屋の四つ角に犯人が立っていた。そして、リーダーらしき者が部屋の前にある壇上に立っていた。しかし、この配置はまるで誰が刑事か分かっているかの様だった。

この状況に偽凱歌達4人は犯人達が言っていた不可思議な言葉の意味が判って来た。

『完璧に犯人全員を狙撃できなければ、。』の“完璧”とは見える犯人達以外に見えざる犯人がいる事を指していた。しかも、武術の達人である国際二課の刑事達を黙らせるだけとなると相当数が、。

偽凱歌はライフルを“ステアー”から“H&K PSG-1”に交換し、スコープなどの調整をしながら的確にそして敏速に指示していった。

内容は偽凱歌が犯人達を狙撃する。但し、狙撃は犯人一人につき2発で犯人の武器を弾き飛ばす事と動けなくする事のみで、狙撃終了後に偽凱歌が突入するというものだった。そして偽凱歌は見えざる犯人について言った。なんと！それは刑事以外のパーティー参加者全員であると言うのである。確かに可能性は無い訳でなかった。このパーティーの主催者は1211と関係があると思われる貿易会社である。証拠として、パーティー参加者を良く見るように言った。プロフェッサーがカメラの望遠を使い、見ているときなこが気が付いた。パーティーの参加者達の足などに銃を隠し持っている事に。これが決め手になり狙撃のターゲットは刑事達以外全員という事になった。途中でマガジンを替える必要が出てきた。

指示後に偽凱歌はプロフェッサーに賭けを持ち掛けた。

「プロフェッサー。もし、僕がここから一番遠い角に居る犯人の左鎖骨を撃ち抜いたら。今回の任務の打ち上げ、全部おごりなんてどうですか？」と言い出した。

これにプロフェッサーは『またか！』という顔をして答えた。

「また、狙撃を賭け事にするのか！？第一、わしはそんなに金は持っとらんぞ。」と笑いながら言った。

「知ってますよ、。貴方が特許権で月々四、五十万も儲けているのを、。あの二人に知れたらどうなるか。ああ～、想像するだけで怖いな～。」とプロフェッサーを脅してきた。

これにはプロフェッサーは『ドキッ!』として慌てて答えた。

「分かった! その賭け乗った。但し、出来んかったら1円も出さんからな! 」と言ったが明らかにプロフェッサーの顔には諦めの表情が出ていた。

「分かりました。これでやる気が出ました。高級日本料亭の予約しておいてくださいね。」と明らかにやる気になっていた。

それをインカムで聞いていた蒼凱と偽龍牙は「凱歌、失敗しないでくださいね! 」と応援した。そして、計画が実行に移されようとしていた。

静かに偽凱歌は体の奥から気を吐き出し”H & K PSG - 1”を構えた。そして、スコープに目をやった。一瞬間の後、パーティー会場には金属が弾ける音と苦痛に苦しむ人の声がこだましていった。

偽凱歌は素早くマガジンを入れ替え、狙撃し続けた。それは完璧に手慣れる動作だった。

そして、犯人並び刑事以外の参加者を狙撃し終わると、偽龍牙が突入してきた。

入るところには参加者に成りすましていた犯人達が隠し持っていた銃が散乱していた。

「警察だ! お前らの言う通り、凱歌の狙撃とこの黒帝 龍牙様が来てやったぞ! 」と言い切ると偽龍牙から離れていた参加者が傷ついた腕で短銃を構えた。偽龍牙は咄嗟に”デザートイーグル”を構えたが、撃つ前に犯人の手から短銃は弾き飛ばされていた。そう、偽凱歌が撃ったのである。偽龍牙はインカムを掴み言った。

「済まん凱歌。助かった。」と窓のそばにより手を振りながら言った。

偽凱歌は立ち上がり、犯人達に自分の姿を見せつけてから立ち去った。

そして、偽龍牙は犯人達を連行し、刑事達を救った。その頃、偽凱歌はそのままの姿でパーティー会場のあるビルの屋上に急いで向かっていた。

- 3分後 -

偽凱歌は屋上に立っていた。敵のスナイパーが居た所に。”ある事”を確かめるために、。

そこには、僅かだったが血痕が残っていた。偽凱歌は慎重にその血痕から血を採取していた。

そして、プロフェッサーに連絡した。

「プロフェッサー。帰ったら一つ検査して欲しいものがある。」と。

「先ほどのスナイパーの血液じゃな。じゃが、一体誰とじゃ? 」とプロフェッサーは答えた。

「まず、“あの男”と俺。そして、。凱歌だ。」と静かに言った。

これを聞いていた凱歌はなぜ自分の名前が出てくるのか分からず、動揺していた。それに気付きつつ無視し、偽凱歌は続けた。

「とりあえず帰ってからだ。帰って高級日本料亭でも宴会後かな? 」と楽しげに言った。その喋り方は凱歌のものではなく、龍牙そのものだった。

プロフェッサーは「確かに左鎖骨を撃ち抜いておったからのう、。仕方がない、。」と嫌々納得した。そして、偽龍牙達は素早く現場から去っていた。余計な詮索が入る前に、。

その後の現場検証でビルから本当に爆弾が見つかった。その爆弾の威力はビルを簡単に倒壊させるほどだった。爆破スイッチはリーダー格の男が持っていたようだ。

～第18章～<挨拶代わり>

立てこもり事件のために出ていた3人が帰ってきた。

一番最初にミーティングルームに入ってきたのは蒼凱だった。

蒼凱は淡々とパソコンに向かい、報告書の作成に懸かっていた。その様子にプロフェッサーは、「そんなに焦る事はなかりうに、。。」と言ったが、蒼凱は「いいえ、今出来る事は今やっておきたいんです。」と言った。プロフェッサーは「分かった。分かった。」と簡単に返事した。

次に入ってきたのは凱歌の姿をした龍冴だった。しかし、龍冴は入ってくるなり顔を変えるために使っていた特殊マスクを外し、机の上に放り投げた。

凱歌には変な気持ちになっていた。自分の顔が簡単に真似されてしまう恐ろしさと自分の顔をした精巧なマスクがあっさり捨てられてしまった事に複雑な胸中だった。

格好こそ凱歌だったが顔も声も龍冴だった。龍冴はプロフェッサーと蒼凱と報告書について話をしていると突然龍冴が入り口に振り向いた。それに同じくしてこの場に居た全員が振り向いた。

その目線の先には、目と鼻を隠す仮面を付けた者が立っていた。その腰の左右に金と銀の蛇が柄に巻きつくような装飾が施された剣を身に付けていた。

龍冴はその仮面の者を見るなり動揺していたが、仮面の者は静かに左の剣に手を掛けた。そして、無言のまま仮面の者は龍冴に向かって走り込んで来た。龍冴は素早く横に飛び退け、その場に居た者達がいらない方へと移動した。その間も仮面の者は龍冴に迫って来ていた。

仮面の者と距離を取りながら、龍冴は立てこもり事件解決に向かう前に出していた”あの黒塗りの箱”を手にしていて。そして、彼は箱から黒金の装飾銃を取り出し手にした。

龍冴は静かに黒金の装飾銃を仮面の者に向けた。仮面の者もそれを待っていたかの様に口元を緩めた。プロフェッサーと蒼凱はうれしそうに見ているだけだった。凱歌ときなこは何が起きたのかわからず、呆然としていた。

龍冴が引き金に指を掛けた瞬間、仮面の者が素早く龍冴との距離を縮め、居合い抜きを繰り出した。龍冴は咄嗟に後ろに飛び退けたが、龍冴の脅威的な反射神経のお陰で避けられたが普通では切り裂かれていた。

龍冴は後ろに飛び退けながら、2丁の装飾銃の引き金を引いた。しかし、敵も然るもので龍冴が連射した弾を全て剣で防いでしまったのである。これには凱歌ときなこは驚きを隠しきれず顔を見合わせてしまった。

龍冴は防がれる事が分かっていたかの様に相手が剣で防いでいる間に後ろに回り、回転蹴りを繰り出した。しかし、仮面の者は繰り出された蹴りを左手を掴み、飛び退け剣を龍冴に向けた。龍冴は向かって来る剣を左手に持つ装飾銃で弾いた。二人は共に飛び退け間合いを取った。

そして、仮面の者はもう一つの剣をゆっくりと抜いた。龍冴も装飾銃を構え直した。沈黙の間が数秒流れたあと、二人は同時に走り出し、ぶつかり合った。仮面の者が繰り出す剣を片一方の銃で弾き、もう片一方の銃を撃つ。それを弾かれていない方の剣で弾く。この様な事が数十回、普通の目では見えないような高速で繰り出し合い、二人は止まった。

龍冴が右の銃で相手の剣を押さえつつ、左の銃は相手の心臓に向けられていた。仮面の者の剣は左の剣で銃を押さえつつ、右の剣は龍冴の喉元に向けられていた。

しばらく動かないしていると、両者共に武器をしまった。そして、抱き合ってしまった、。。「久しぶりだな～！その姿で逢えるのをどんなに待っていたか。お前が居なくて辛かった！」

と龍冴は言った。正しく言うと龍冴に抱き付かれたしまった仮面の者は言った。

「お久しぶりです。しかし、抱き付くのはやめてください。恥ずかしいですから、。」と困惑気味だった。

「ああ、すまん。」と言い、龍冴は抱き付くのをやめた。どうも、先ほどの対決は挨拶代わりだったらしい。

二人が凱歌ときなこの前まで来ると二人が謎めいた顔をしているのに気付き、思い出した様に言った。

「あっ！二人はこの姿のお前を知らないんだっとな～。コイツも俺らの仲間です。さっきのは挨拶代わりなんだ。なんか不思議な感じだな。この紹介の仕方、。自分で説明するのが一番だろうから二人に説明しろよ。」と龍冴が仮面の者に言った。仮面の者は頷いてから咳払いをし、二人の方を向き話し始めた。

「お二人にはこの姿では初めてですね。私は天山 秋と言います。説明と言われましたが実際にした方が分かると思います。」そう言うと彼は喉を指で軽く突つきながら再度咳払いし話し始めた。

「この声でお分かりだと思いますが、ぼくは碧河 葵であり、碧河はぼくの仮の姿です。」と凱歌の声で言った。二人は愕然とした。なぜなら彼は薬も何も使わず、男性としてはやや高めの声で低めの凱歌の声に変えたのである。そして、仮面で顔の鼻から額にかけての半分が隠れてはいたが、その声から表情も優しいホイの様に見えたのである。

「騙すつもりは無かったのですが、上からの命令と国際二課そしてきなこさんに近づくために貴方に化けさせてもらいました。勝手に顔を使ってしまってすいませんでした。」と凱歌ときなこに元の声で謝罪した。

二人は、呆然としつつ首を横に振っていた。その様子を見ていたプロフェッサーが静かに近づいてきた。とても怖い顔をして、。。

龍冴はそれに気付き、後ろに下がってしまった。天山、凱歌、きなこの3人は『なんだ』と思い、その光景を見ていた。

「お前、。何か大切な事を隠しておらんか？」とプロフェッサーはいつもののんきな感じの声から一変した低い怖い声で言った。

「大切な事？そんなの隠してないよ、。。」と龍冴は言いつつ、近づくプロフェッサーと距離を置いていた。

「じゃあ、なぜ下がる！このわしがお前の動きを見ていておかしい事に気付かんと思うのか！！」と言い、70歳を超えているとは思えない素早い動きで龍冴の懐に入り、龍冴の左脇腹に平手を当てた。

龍冴はプロフェッサーの平手が当たった瞬間、後ろに僅かに飛ばされた。そして、物凄悲鳴を上げ左脇腹を押さえしゃがみ込んでしまった。

プロフェッサーは静かにしゃがみ込んだ龍冴の脇腹を押さえる腕を外し、上着に隠れた脇腹を見た。

上着に隠れていた脇腹には、傷があり血が流れていた。そう、龍冴は敵のスナイパーの奇襲の際に銃弾を受けていたのである。

「やはりのう、。なぜ隠していた！こういう事はしっかりと報告せんか！馬鹿もんが。来い！」とプロフェッサーが腕を持ち龍冴を立たせた。

龍冴は「自分で出来る！」と反抗していた。しかし、プロフェッサーに「これがお前一人で出来るか！」と貫通している傷を見ながら言った。それでも龍冴は抵抗していた。

その光景は、まるで歯医者に行きたくない子供が嫌々親に手を引かれて連れて行かれる様だった。

きなこなどある人を除く全員が笑ってその光景を見ていた。しかし、凱歌だけはその光景が羨ましく思えた。きなこは凱歌の淋しげな表情に気付き、その心中に気付いた。

この親子のようなやり取りを静かに見つめていた、。。

～第19章～ <正体と秘密>

あのやり取りの後、龍冴とプロフェッサーが戻ってきたのは1時間後だった。

ミーティングルームに帰ってきた龍冴は治療を終えてきたがその顔はまだ怒っている様だった。

プロフェッサーは呆れた表情で入ってきた。そして、「いい加減にせんか！」と遂に怒鳴った。

龍冴は「分かっているよ！」と言い返しながらかつて来た。

「済まなかった。もう大丈夫だ。怪我の事を隠していたのは、みんなに心配を掛けたくなかったんだ。でも、結果的に迷惑掛けちゃったな～。」と龍冴は謝罪した。

みんな、「いえいえ、心配を掛けないと思っての事ですからね。」という調子で答えた。

しばらく和やかな間が広がっていた時だった龍冴がはっきりとした声で言った。

「さて、そろそろ本題に入らないとダメだな。凱歌、君の治療も兼ねて俺達の正体について。約束通り話す事にしましょうか。」と。

「そうじゃな。いい加減、本当の事を話さんことにはこれからの事も決められんからのう。」

とプロフェッサーが答え、他の二人も同意した。

凱歌ときなこは『遂に龍冴達の正体と真実を聴く事が出来る』と表情では喜んでいたが、内心は自分達の知らない裏世界を見ってしまうのではと不安もあったので複雑だった。

「では、全員席に付いてもらおうか。凱歌ときなこさんはこちらへ。俺達は反対側で。」と龍冴は席を指示し、二人を座らせて龍冴達は何か相談していた。

- 数分後 -

相談が終わった様で凱歌達から見て左に蒼凱、天山、プロフェッサー、龍冴の順に座った。

そして、4人が顔を見合わせ、龍冴が話し始めた。

「まずは我々の組織について、説明しましょうか。」と言い、二人を見た。その目は「本当に知りたいか」と言っているかのようだった。二人は静かに頷いた。

「では話そうか。我々はある所からの指示の元で動く特殊組織であり、1211のような闇組織ではない。何て言ってもいいのかな、。よし、はっきり言おう。我々は世界を股に掛ける公認国際特殊情報機関なんだ。つまり世界を裏で守ってる。しかも俺達は特殊機関の各部のリーダーなんだ。」と龍冴は言った。

二人はあまりにも現実的ではなくそして、想像を超える事に説明が理解できずにいた。そんな二人を見てプロフェッサーが付け加えた。

「わしら組織に所属する者はそれぞれここへ来る前は凱歌、お前と同じ犯罪者だったんじゃ。

そして、ここでみんな更生したんじゃ。それぞれが持っている”才能”を活かして、その力を正義のために生きる。これがこの組織の目的じゃ。組織はそれぞれ”情報”、”変身”、”研究”、”死”、”生”の5部門に分かれているんじゃ。」とプロフェッサーは言った。

これに凱歌ときなこは4人の顔を見回してしまった。

「まあ、すぐに理解するのは難しい。普通は知る事も触れる事さえない世界だからな。でも、俺達は君達の味方だ。1211を倒したい、協力したと思っている。まあ、その意志がまだあるならばだがな。」と龍冴は言った。

少し間が空いた後、龍冴は再び話し始めた。

「今度は個人の事を話そうか。ええっと。じゃあ、蒼凱からだな。」と蒼凱は振られ、静かに話し出した。

「僕の名前は分かっていると思いますが中峰 蒼凱と言います。僕は”情報の使徒”と呼ばれる役目を

しています。僕がこちらに来たのは今から15年前の10歳の時です。それまではアメリカで大学に行きながら、世界中のありとあらゆるコンピューターにハッキングなどをしてました。5歳の時にはアメリカ国防省のコンピューターにハッキングしていました。でも、これが大きな原因になって8歳の時に捕まって2年間の服役中にここへの参加を勧誘させて入ってきました。今は自分の”才能”が人を守るために使える事を誇りに思っています。」

蒼凱が言い終えると少し間が空いて天山が話し始めた。

「私の名前は天山 秋です。私は”変身の使徒”の役目を仰せつかってます。ここへは蒼凱より遅い10年前に入りました。私はここへ来る前は世界各地で泥棒をしてました。見ていてお分かりだと思いますがこの変身術を使って盗みをしてました。」と簡単に説明した。しかし、その説明に不服そうに龍牙が付け加えた。

「でも、秋は理不尽に金持ちどもに奪われた大切な物があるべき所に返してたんだ。あくどい事をしてきた金持ち達からしか盗まず、盗んだ物は全部孤児院や不幸な人々に寄付していたんだ。正に正義の怪盗だったんだ。だから、いい事をしていたんだ。やり方はまずかったがな、。まあ、怪盗ライトニング。」と龍牙は誉めた。きなこはその”怪盗ライトニング”という怪盗名に覚えがあった。そう、正義の怪盗と呼ばれていた大泥棒だった。

しかし、秋は「いえいえ、そんな誉められるような事ではありませんし、罪を犯した事に変わりありません。」と謙遜してしまった。その後、みんなが感心していた時だった。

プロフェッサーが『もう話をしてもいいか?』と言わんばかりに咳払いをした。全員が静かになった。「じゃあ、わしについての話をしようかのう。わしは”研究の使徒”を務めている。そして、この組織の創立当初からのメンバーであり、創立者の一人でもある。創立の理由は簡単じゃ。わしは龍牙を生まれた時から知っておる。いや、正しくは生まれる前から知っておる。コイツの”能力”も知っておった。コイツが捕まった時に、このままコイツの”能力”をただ死刑という刑罰で失ってしまうのは、もったいないと思ったんじゃ。こうした特殊な”才能”を持ち、又それを間違った方向に使ってしまった人間は多いと思っただのう。そんな者達を助けたい、”才能”を世界のために活かしたいと思っただの組織を作った。

わしのう、凱歌。君を1211に入る前、つまり養成所に居た頃に見た事がある。いつか、組織に入って欲しいと思っただのう、まさかこんな事になるとはのう、。。」これに凱歌は驚いた。

しかし、プロフェッサーはそれを感じつつ続けた。

「わしもこの組織が出来る前、つまり正義に目覚める前は皆と同じ罪を犯していた。わしは科学者としては最低な事をしてた、。当時”悪魔の頭脳”と呼ばれた危険な科学者じゃった。それは、大量殺人兵器の製造や人体実験をしておったんじゃ。わしの作った物が多くの人間を傷つけ死なせたんじゃ。

そして、凱歌、君にも迷惑を掛けた。あのチップはまだ悪に身を投じていた頃のわしがつ作ったものなんじゃ。本当に済まんと思っただのう、。」とプロフェッサーは俯き、凱歌に頭を下げた。それに対して龍牙は言った。

「でも、プロフェッサーはあのチップを作った当時は、脊髄損傷の人間を救うために作った物だったんだ。それを誰かが利用した。でもあのチップを開発した後、プロフェッサーはそれまで居た組織を裏切り、姿を、俺の前から消したんだ。つまり、あのチップのお陰で正しい事に気が付いたんだ。それだけは分かって欲しいんだ、。。」と龍牙が言い終えると全員が黙ってしまった。

きなこは『それぞれがいろいろな過去を持っていて、過去にしてしまった罪を償うために、持っている”

才能”を活かすために集っている事に感動に似たものを覚えた。そしてここならホイさんを救える』
と思えた。

凱歌は『ここでなら自分の罪を償えるのでは。』と思えた。しかし、プロフェッサーが言った言葉の中で
気になったものがあった。それは龍冴の時だけ”才能”では無く”能力”と、まるで生まれる前からその”
才能”が出てくる事が分かっていたかの様に言っていたのである。『この二人にはまだ何か”秘密”が
ある。』と凱歌は確実に思えた。そして、それはとてつもなく大きな”秘密”な気がした。又、自分にも
関わっているような気がした。直感的にだったが、。

しばらく二人の頭の整理も兼ねての沈黙が続いた、。

- 5分後 -

突然、龍冴が立ちあがり部屋を出て行ってしまった。何事かと思い、全員の視線が龍冴に集まると
「説明に必要なものを取って来る。」と言って出ていった。

2分ほどして、龍冴が帰ってきた。その手にはファイルが数十冊も入った箱と肩にカバンを掛けていた。

ファイルの入った箱を机の上に置いた。きなこはすぐにそのファイルが何か気が付いた。よく仕事で
使う物だった。そう、これは事件の報告書だった。しかも見た感じ、ほとんど狙撃事件のもの様だった。
「これは俺がここに入る前に行なった事件のほんの一部だ。最後の方の事件のものだ。

あと、残っている報告書だけで10箱以上はあるな、。」と苦笑いしながら龍冴は言った。

きなここと凱歌は愕然とした。なぜなら報告書だけでこの箱に50冊以上は入っていた。つまり、事件と
しては500件以上は行なっていた事になる。そして、どれも”連続狙撃事件”だったりもしていた。
凱歌とは比べ物にならない数だった。しかも、”残っているだけで”というのである。二人は龍冴がますます
分からなくなってしまう。

「まあ、少し報告書を見てみるといい。少しは参考になると思う。」と静かに龍冴は言い、カバンの中身を
整理していた。その光景にプロフェッサーは気遣い、皆から離れた所に居る龍冴のそばに向かって
いた。きなここと凱歌は、言われた様に報告書に目を通していった。

二人はどの事件もとんでもないものである事が分かった。書かれている狙撃はどれも300メートル
以上の距離からの狙撃だった。更に暗殺に至ってはターゲットの厳重な警備を潜り抜け、短時間で
暗殺していた。そして、爆弾テロさえも行なっていた。ここまで凄い凶悪犯は見た事が無かった。
それが『こんなに明るくていいのか?』と思わざる負えなかった。

しばらく報告書を見ていると、どの報告書にも犯人についてこう書いてあった。

『犯人は伝説の暗殺者”赤眼の死神 禍悪蘇(カオス)”であるとしか考えられない。』と書かれていた。
しかし、禍悪蘇の特徴に赤い瞳があるが、龍冴の瞳は赤では無く黒だった。これは二人共
『どういう事?』と考えてしまった。

そして、服装を変えた龍冴が近づいてきた。その格好は正にそれは”死神”という言葉が合う黒い頭
の先から足先まですっぽりと隠れるローブを身に付けていた。そして、その手には鎖でぐるぐるに
巻かれた黒鉄の箱が合った。そして、龍冴は静かに話し始めた。

「この格好は俺が暗殺をしていた頃に着ていた物だ。もう20年以上着てなかった物だ。そして、この箱
には俺が”死神”と呼ばれる所以である愛器が入っている。それはかなりグロテスクな大鎌が
入っている。俺はもう見るのも嫌なんでこうして鎖で封じているんだ。そして、俺が狙撃をする時に
使っていたライフルは今も使っているが、”ステアーAUG”の改良した物だ。資料を見ていた分かった
と思うが、俺は狙撃から爆破事件までありとあらゆる凶悪事件をやっていた。これは変わらない事実だ。

前にも話したと思うが俺は”生と死の使徒”とやっている。俺がここに入った理由は、小さい時から知り合いであるプロフェッサーが居た事もあったが一番の要因はある出来事だ、。ある女性のお陰なんだ。

その女性に会う前の俺は狙撃や暗殺など人を殺す事は食事をするのと同じ様に当たり前の事だと思ひ、感情は必要のないもの、弱者が持つものと教えられ、そう思っていたんだ。そんな時にあいつに会った。”青水 きなこ”に、。。」とここで言葉が切れてしまった。その時、きなこは同じ名前を持つ人間に龍牙が助けられた事に妙な因果を感じた。少し間が空いた後、龍牙は溜息をついてから続けた。

「きなこ、いや分かりづらいから青水と呼ぼう。青水はきなこさんと同じ刑事だった。しかも、国際事件の担当でもあった。もちろん俺を追う立場だ。俺は日本にターゲットを追ってやって来たんだ。そこで刑事としてではない青水に会った。人間性が全く無かった俺に色々教えてくれた。感情を、知らない事、様々な価値観を。その内、俺達は君達と同じ様に愛し合ってしまった。

というか初めて”愛”、”恋”を知った。人を人と思っていなかった奴が”命の大切さ”を知った。しかし俺は暗殺者だ。生まれた時から決められていた定めだった、。俺は日本でターゲットを狙撃する事になった。もちろん刑事である青水は俺を追っている犯人と知らずにいや知っていたのかもしれないが、狙撃のためにライフルを構える俺の前に現れた。そこで初めてアイツが刑事である事を知った。俺は自分の生まれた理由に従い、狙撃をしようとした。止めようとした青水と本気で戦い、暗殺を遂行しようとした。でも、青水に教えられた感情に負けちゃったんだ。撃てなかった。殺せなかった、。。

自分の存在価値を自ら消してしまった、。そして、俺は自分の存在価値を探すために組織を裏切った。青水の手当てをした。こんな時だけは暗殺者として学習した人体の構造が役に立った。皮肉だがな、。。」と龍牙は続けようとしたが、言葉が出なかった。静かに時が流れた。

「逃げてから1年の時間が経った。俺は自分がしてきた事に決着を付けるべきだと思った。それは”死”を意味していた。だから、その前に青水に会いたくなって日本に戻った。そして、思い出の場所に行っただ。そこに行っても逢えるわけじゃなかったのに、行けば逢える気がしたんだ。ところが強い思いは繋がるもので俺がそこ居ると青水が現れたんだ。なんか御伽話みたいだが、そこで決心を伝え組織に向かおうとしたら、あの馬鹿娘は”私も行く。”なんて言い出した拳銃に、ダメだと言うと”力づくでついて行きます。”なんて言い出して、思いきり蹴りを繰り出してきやがった。俺は頭に来て青水の計画通り挑発に乗ってしまった。そして、俺が左手で正拳突きを繰り出したら待ってましたと避けずに立ち尽くしやがった。俺は咄嗟にヤバイと思って止めようとした瞬間、俺の左手とアイツの右手を手錠で繋ぎ、”これで連れていかざる負えないでしょ。”って手錠の鍵を捨てながら笑いやがった。俺はアイツの男勝りな大胆さに内心舌を巻くばかりだった、。。」と龍牙は話した。

凱歌はそっときなこを見てしまった。そして『名前も同じで考える事も同じ女性がいるとは、。』と呆れてしまった。

きなこの方はというと、『分かる。青水さんの気持ち。』と納得してしまった。

「それから口喧嘩しながら、俺は何とかして手錠を切ろうとした。そうしたらあの馬鹿娘は俺に散々”二度と武器を持つな”と言っておきながら、俺にアイツは拳銃を突き付け”私に従って”なんて言うから呆れて言い成りになった。それから、ボスの居所をライフルの用意役の”八雲”に聞きに言ったんだ。」と言った瞬間、きなこと凱歌は立ち上がり「八雲だって!」と言った。但し、凱歌は声がまだ出ないので口をパクパクするだけだったが、。。

二人の突然の行動に龍牙は、「なんだよ!八雲を知っているのか?」と驚いて言った。二人は頷いた。しかし、龍牙はおかしいと言わんばかりに首を傾げ言った。

「でも、俺が知っている八雲は確か、5、6年前に病死したはずだけだな、。あっ!もしかして息子の

八雲かもしれない。確か、今30歳半ばだった気がするな〜。」と龍牙は独り言の様に言った。

きなこは「確かに私達が知っているのは30半ばの男です。そして、1211のライフルの用意役をします。」と答えた。

「そうか。じゃあ後で、会いに行かないとな。にしても、もし親子だとしたらあの骨董品店を続けているのか。全く懲りん奴らだ！やっぱり逮捕しておけば良かったかな、。。。」と龍牙は言った。

「まあこの事は置いて話は戻る。これからが重要だ。君達が迎えてしまうかもしれない、最悪の結末だ。そこで八雲の所に手錠を付けたまま向かったんだが、またこれが大変だった。手錠で繋がっているままだから二人がくっついて動かなければならないし、一番は目立つ事だった。隠すに隠せず、拳銃に喧嘩はするわでもう大変だった。どっちも上に立ちたがって、。。。

まあ、何とか着いたんだが奥に逃げようとしたんで手錠で繋がった手で胸倉を掴んで脅してんだけど言わないいで、青水が近くあった価値のある菊人形の首に手刀を向けて脅して言わせたよ。

全く恐ろしいよ。ちょっと可哀想だったがね。その時、見てたガキが君達が知っている八雲だと思う。

内容だが、驚く事に”今、日本に居る”なんて言うからビックリして危なく人形の首を落としそうになった。更に居所まで言ってくれたんで向かう事にした。でも、これが畏だった。俺達は組織をなめていたんだ。いや、正しくはボスの冷酷さを、。。。

俺らはそのまま施設に突入していた。雑魚を倒しながら進んでいった。

途中で手錠が切れちまったんだけどもう戻る事も出来ないいで二人で進んだ。そして、遂にボスの元に着いた。そこにはナンバー2のスナイパーも居たんだが、俺達の相手じゃなかった。

ボスと二人掛かりで戦ったが、歯が立たなかった。そして、青水が飛ばされ意識を失った。だが、奴は意識の無い青水にとどめを刺そうとした。俺は咄嗟に間合いに入り奴の剣を止められず、右手首から切られ、薄れ行く意識の中で守りながら戦ったが、遂に刃が俺の切り裂こうとした瞬間、。。。」とここで龍牙は固まってしまった。

プロフェッサーが苦しそうな顔して龍牙を見ていた。彼はこの結末をしているのだ。

少し間が空いた後、龍牙は二人を見て言った。

「青水は、。。俺の前に身を投じたんだ。そして、切り裂かれた。でも死んではいなかった。俺も戦う力が残っていなかった。そして、奴は俺に見せしめとして自分の子供に銃を持たせ、青水の胸を撃たせた、。。その瞬間、何かが吹っ切れた。押さえていた使っではいけない力を使ってしまったのかもしれない。そこから記憶が無いんだ。気が付いた時にはプロフェッサーが横に心配そうな顔して立ってたよ。病室のベットの上だった。そして、切れ落とされた筈の右手が付いていた。その手は、。。。

俺が初めて愛した女性のものだったんだ。それが意味するものを、それを理解してからは何も感じなくなった。何も出来なくなった。それから5年間は精神病で廃人になってた。そして、失声症にも懸かっていた。それを克服してから、今の様に人を守るために生きてるわけだ。

凱歌。お前は幸せだよ。心配してくれる人間が沢山いる。何より愛する人も母親もいるじゃないか！俺は生まれた時から親が居なかったし、愛する人を自分の力不足で救えなかった。でも、俺は青水の分まで生きて罪を償っていく。お前は どうする？このまま心の傷を秘めたまま逃げるか、それとも自分を変えた組織を消し去り、人を救い罪を償うか？」と龍牙は凱歌に問い掛けた。

凱歌は俯き考えた。そんな中でプロフェッサーが「”自分の音”で言ってみるんじゃ。」と言った。それが何を意味しているか凱歌は分かった。そして、凱歌はそっと口を開いた。

「僕は、自分を変えてしまった1211を倒したい。」と静かにそしてはっきりとした声で凱歌は言った。

きなこはそのホイの行動に驚いた。失声症で声が出なかったはずなのホイの声が出たのである。きなこは確かめる様にホイを見た。凱歌は声が出た事に自分でも驚きつつ、きなこを見て言った。「もう心配要らないよ。僕は幸せ者だからね。」と微笑んだ。きなこは嬉しくなり、「ホイさ~ん。」と抱き付いてしまった。これには他の4人が目を覆い驚いてしまった。そして、大騒ぎになってしまった。

しかし、驚きの中で龍冴とプロフェッサーが話していた。

「やはり同じ様な境遇を話すのが一番の楽じゃったろう。しかし、あの”DNA検査”の事、お前の”正体”については言わなくていいのか？凱歌は”知る権利”を持っているはずじゃが、。第一、俺の説明では時間の”歪み”が出来てしまうぞ。」とプロフェッサーがきなここと凱歌に聞こえない様に言った。

「いいんだ。知らない方がいい事もある。今、”検査”の事やらを言ったらまた失声症以上の事になってしまう。この先、いつかは知る事になるだろうし、必要なら俺とアンタの口から言えはいい。今はそっとしておこう。そして、あの二人には俺と”きなこ”が迎えてしまった最悪の結末は迎えさせる訳にはいかない！俺の全てを賭けても、二人には俺達のみで幸せになってもらわないとな。」と静かに龍冴は言った。

その後、プロフェッサーから全員が昔の事は全て抹消され、新しい今の名前、経歴を持った事も話した。そして、”国際”というだけあって世界各国に支部があり、自分達と同じ様な経歴の持ち主が部下として更生し、働いている事を説明した。

説明した後に「本当にこんなに説明して良かったのかな？」と言い出した。

そして、「抹殺されたりしないよ。多分、。まあ、いざとなったら俺が責任を取るから心配するな！」と龍冴が明るく言った。

きなここと凱歌には、その龍冴の明るさが無理やりである事がすぐに分かった。暗い雰囲気消す様に、。そして、龍冴が言っていた事の矛盾に気が付いていた。彼はどう見ても30歳になったばかりにしか見えなかった。しかし、話から考えると凱歌よりもはるかに年上で無ければならないのである。

二人はまだ龍冴には”秘密がある”と考えたが、今は聞かなかった。凱歌のために辛い過去を、大きな心の傷を話してくれたから、。。

二人は龍冴の優しさに感謝し、疑問を胸の中に一旦しまい込んだ、。。

- 続く